



Handwritten text in a cursive script, likely a form of Chinese calligraphy or a specific dialect. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected, characteristic of cursive writing.

首字年... 吾紙... 活語... 見...
Handwritten text in a cursive script, similar to the right page. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected.

おのれは... 物... 思... 天保九年閏四月

天保九年閏四月 江戸千楯

活語雑話

此小濱... 江戸... 活らき... 思ひ... 覆ひ... 見ふ... 其れ...

うれとをちくくうきほらぬゆくついでまきそ人
 とあひくくうくふはあらぬもこれらを初ひまかひの
 爲ともたらんかおやゆるともあまれとかきとそへ
 て活語雜話と名つけものほろそ天保と云ふやうりまり
 て四しせうたりれる春代あうそたる月のとをうあはる此日

若狭義門

- ① 自他の詞乃事
- ② ちをれる斗そ女郎花
- ③ 給ハせる 給ハせしる
- ④ みる りる

⑤ 四段カもをくら幾此第四音^{□□□□}けてへめれより
 ら。る。れ。け。く。さ。た。ふ。こ。や。は。あ。も。や。後。の
 第二音^{□□□□}き。ち。ひ。み。り。を。一。系。と。く。け。る。詞。も
 との同異

- ⑥ さける さけしるの類
- ⑦ ありさる ころる
- ⑧ 浴むしり詞の度
- ⑨ 聖りを用いへるのあう
- ⑩ くま^醫ん くま^藥る
- ⑪ れこそれ おこせられ

(十二) 貴まる

(十三) み陀る

(十四) 八衢序なる詞の活きの事

(十五) 幾^レあ^レち^レい^レみ^レり^レを^レあ^レう^レく^レく^レけ^レせて^レへ^レめ^レれ^レを^レ混^レす^レま^レき^レ夏

(十六) 活む つめる つみし

(十七) むくく いあへ

(十八) 散らばる散らるん

(十九) 散ぬれば

(二十) 道也さま

(廿一) 名をやたちたん

(廿二) 沖る

(廿三) 言足ぬげといへる詞つひ

(廿四) ある なる

(廿五) 居り有りとの活き肉の同異

(廿六) 似する 煎さける

(廿七) いらまへ

(廿八) いとをみかへト 活き

(廿九) 古へ今と活きうぬ異なる詞も

(三十) ままら 活き

① 自他の詞の事

建正とも萬曆ともいひし本居大平翁のまゝかこなりしを
 父翁よりきたちてをやくなくありあきなる人なりなりそ
 せうありしよふみをあたる鐸屋にて文會とわりてあひ
 ける時文化十年ハウリの夏ありられハ鳥丸の西四条の北のふ
 てなりぬかのみ詞のつらき夏ともかこりし中一建
 正のいへらく入らんいりゆるいれと羅行四段に用らく語
 明らんあきたなく加行四段に活く語これらもおわく物のれの
 ころあうふいゆをやくて其ころりの下二段にわりんわりん
 いまんいんくしやういんえ物を然るる夏とすつころれ

たれと夜の明る風の吹入るあともたぬおのつうしうらふ
 つうあとおといるかるあまひるはあましといへりし
 も今天保四年かそあれそりせうあぬむうしとなりて彼
 鐸屋も處りそりそのむしうありあひし人々も大うそ
 えたうそちれるはらうし思へハくる事とも今を珍しかた
 け誰もあれることあやういひわとも徒もあほうめれ押ち
 きころ出る詞のうよひちし書えむねこれうわきされ此ころ
 の事をこめてつはらなるえ作ぬかうたえり
 こひををしうてさてやうし考へひろめえさるやくとも
 少々いれしよりその比々詞ハ衢のありすれとされるし
 りましうくられ年もつまさりし比して其書をそいと解

カキテ釋ニモおきるとも馬よりありたる紙のふトアレト下
 ハおきるとハ活カヌニアラスマトイヘリシニワレ答ヘテケニサ
 ヤウナリおきるとイハル、語トモハミナ羅行四段ノ活用ニテ取
 ちる 苟もるナトノ如シ抑下ハ羅行中二段ノ活キ語ナリ中二
 段ト云ハマるノ二段ニハタラキテソノ下ノ段ナルれモジハ活
 ラカヌイフコトナレハイハユル羅行中二段ニあり ちるトノ
 ミハタラキテ第四音れニおきるとハ活ラカヌ例舊マヲおける
 聽許ヲおけるトハイフヘカラヌニオナシサレハ古今ノ序ニ何人
 カ細書シケント誰モテノルカノ馬より落て云云ノコトハタト
 ヒコトノニコトハ然ランニコレ歌ノ第二句ハナホを^{折有}おけるヲナ

ルヘシトイヘハ千穎サハラマるト活ク語ハまるとイハルレト
 下^オゆるハおらトモ下^オれトモイハル子ハおきるとハ云マシキコ例ス
 ルニ外ノ行ニテモ起^オくるヲおける 落^オつるヲおける 侘^オあるヲわべ
 るトヤウニハ云レヌニ准ヘテモゲニ思ヒシラレツト云ケレハアリ
 アヒシ信敬ナト皆拵チテ詞ノ活キト云コハ實ニ心ヲ用フヘキコ
 也鈴屋翁ハカリ世ニ抜タル先生ノ殊ニイハユル詞ノ活キト云コ
 モ誰ヨリモ勤ク辨ヘテ人ニモシハ、ヲシヘラレタメルカウヘニ
 テスラフトシテニヤサシモ^オをノカナサヘ異ル詞ノカレトコレト
 ヲ混シ釋レケンヲ思ヘハ返々モ此活キノ學ヒハ等閑ニ意エテ
 アルヘキコナラスナトイヘハ千穎ソモ斯ウ心ノ付ヤウニナレルハ

モト本居翁ノ活用抄ニ本キテノ詞ハ衢ノ恩光ト思フヲソノヒ
 カリニ報イントテハ即ソノ翁ノ玉勝間ニイヒオカレシ如クソノ
 人ノアママチヲ改メ評ムルコソ彌ヨカラメナトモイヒシコソウ
 ヘナルコトモナリシカ 但シコハモトおろくヲおれるト寫シ僻メツヲを
 ねるトサフニアヤマレル本モ出来シナラムニ首
 オモムキ下馬ノコトミサレハヲカシカラヌニ非スマト
 イフ人アレトナホ折まるナルヘキト委クハ別ニイフヘシ サテ今コレヲ思出
 テカイ付ルニ就テ又擇ヒ置クヘキトコソアレソハ中勢集ニ三
 条の女御かてこあハせしむるこあしむる此をける濱へ
 のかてしあぢちしをや色もむきしえそむらんトアル歌ノ
 也コノ第二句鶴ノ下リ居ルヲ下れるトヨメルヤウニモマタ居有
 ノコ、ロノヤウニモフトハキユユメレトトモニシカラシコハタ、かて

志こヲハ鶴ノシカセルヲイヘルニテ折れるナルヘシ馬より下れる
 トイヒ濱邊へ鶴の下まるとイヘルモノトアヤシウ證シアフコト
 勿レイハンヤ居有ヲサラニ居有在トヤウニハイヒカタカルヘキ
 ヲヤ コノユエヨシハ居りと有りとの活きさぬの
 同異トイヘル末ナル(并五)ノ条ニテシルヘシ

(三) 給ハせる 給ハせる

此白雲の濱人北条氏誦むとひこもてる後れし鴈をうり
 におこせらるまゝに貸しつるを返し便りみ問へらく此書處
 處に朱して批圈とくくの印の見える中「ハ丁」や後ハせは
 の處せとあるいろいろある御意と覺りうづつ其外の批圈を大
 くくくこれゆゑならんとおしかり侍れとてつる小答へる

寫しおく さうをこれとて右氏誦の詞と処々といへる朱

後れし乃五箇条のいふ審一と云ふ一子尸は中二丁ウラ
そ文字々如作抄終本二ハ有しを板下二脱しを校合
二尺落しは也序と拍きある五丁方と信らし二拙子改め条末
之き八丁とありしきをぬはせるは二拙子ふ心好くする
作しゆく初中心付考るるは説実とあり感心不斜と右
こか板を改められ子楯ハ中々ふん付る信ず股ふ淺きなり
叔子楯といふ状ニ多羅ありは信ずといふことなり己の語人
物々情あり誣るる後とも云ハあるハ信をゆめ時君と云き
ものして学者と云ふは又二源又五といふ物遠ありと云

更この遠慮あるはくはを遠く申すハ又つとてさうと物
は友のハ皆的中云

とありさて此文をも事のついでにせられハ氏誦いみじ
感して世のういふての先生宗匠手紙より云んやいつてハ
誰しも見せをやといひり抑給ハせる給ハせる二とも固より
例なきことといふハ何らと其文々のありに從ひつよく
ことやへて書出つへきこと其まも一の活語の學ひの要と
るしといふへられハ今くかん

四 いさる いさる

ある人とも和讚ニ安樂淨土ニイタルヒトトノ玉ヒ御文ニ滅度ニ

イタルトモトアナルの^いるの詞ハ方ナシケレトモコ、ロハハ同シカ
 ラス和讚ナルハ至レルトイフコ、ロトキケリソモ至レルトイフヘキ
 ライタルトイヘル類ヒスヘテ大カタノ哥文ニモソノ例アリヤトア
 リケルニ答フケニ然ル^ナリ但シ至^ルトイフト至れるトイフト
 サテ又至りしトイフトノ三ノケチメヲマツヨクコ、ロウヘシ^い
 り^ハ前^ハステニ至リヲハリテシ^ヲトウテ、後ニ云ニテ^ハ
 世ニイハユル過去ノ^ナリ^いるハ至リ有ルノツ、マレルニ
 テ今ステニ至リテアルナリ至るハ今正ニ至ルニテ未タ至リノハ
 ラサルアヒタナリカク三ツノ差別アルカウヘニナホコマカニイ
 ハ、至^るハ狭ク至り有るニ局ルヲ至るハ寛クテ今至ルヲ云

ハ固ヨリニテ亦ハ至り有るヲモイフニ通スサレハ減度ニイタル
 トモトアルハ至り得サルアヒタニソノマサニ至り得ヘキヲ云ヘ
 ル也又安樂淨土ニイタル人トハステニ淨土ニ至レルヲ然ノタニ
 ヘルナリカク至ルハ寛ク通シ至レルハ狭ク局ルコト万葉ノ宇
 ツカヒニテモ知ラル、^アリ^ソハ置露トカケルハ^おく露トモ^お
^くつゆトモヨムヘキニアタルヲ置有露トカケルハ^おね^る露
 ニテ^おく^つゆニ非ルナト准フルニ至るハ至^トノミカキテカナラス
 至有トハカクヘカラス至れるハ至^トノミモ亦ハ至有トモカクヘキ
 也サテイタルトイヘルガ至レルノ意ナル類ノ例^凡イト多カル中
 ニモトモ明ニテチカキヲイハ、古今集ニ白雲のやへ^いか^され

るをちよても思えん人一心をうつをトヨメル哥ミエタリコレハ
 白雲ノ今マウノカサナルニテハナレステニ重リ有ルヲ重ある
 トヨメルナリ淨土ニ至レル人ヲ淨土ニ至ルヒトトノ玉ヘルハサ
 レク此例ナリ此哥貫之家集ニテミヨ白雲のやへくあれるを
 ちよてもトアリコレニテ曉ルヘシ古今ニテうたはるトアルハか
 なるヲイヘルナル明ケシ後撰ニ出タル遍照僧正ノ世をそ
 むく苔の衣をたひとくさねえうとくいさあうゆへコハ
 カノ僧正出家シテ後程ヘテノヲリノナレハ世を背きあるニ
 テ世をそむくトイフヘキナレト五七ノ句シテヘノタメニカク
 世をそむくトハイヘルモノナルト事實ノウヘ明シ又古今序

一モ出タルさく花ニ思ひつくこのあちきかさトイヘルとく花ハ
 さける花ト云意ナルナト准ヘテシルヘシサテカクかさあるゆら
 るむらるいしれるヲいしるそむくさくうさあるトイヘルヤ
 ウノ例ハオホカレトさくそむくいしるかちあるトイフヘ
 キヲいしれるそむらるさけるかさあるトヤウニイヘル
 ハ古ヘノヨキ哥文ニハサラニナキト也イハニヤさくそむく
 いしるかさあるヲさきそむき至りくあなり
 トヤウニハヤクタル世ニテモノアヤニモイヘル事ナ
 ク又さけるそむらるいしれるトイフヘキヲあきそむき
 いしりトナトモムカシ人ハサラニイヒタル例ナキヲサル云

ヒマカヘトモ近キ世人ニハイト少カラスサレハ玉霞十一之ヲ
 教ヘ論セルヤウ慇懃ナリソノ同レナルヲ今ハタ斯ウクタ、
 レキマテイヘルハ大方ノ世ノ詞ツカヒノサタノミナラス問ヒ
 マセル至るトイフ詞ニツキテハ和讚ナルト御文ナルトヲハコ
 レハソレハトヨク解リ分サルトキハカタミニイミレキヒカヲ
 法門ノウヘニサヘトモスレハ謬リ認ムル徒モアリ又ハカリノ
 ニシアレハソカレカクイヘハソノイミレキトイフナルヲハイハ
 ストモ固ヨリユ、レク恐レミ五ヘルコトナラスヤトイラヘツル
 コトアリキマコトマ至れるハ至リ有也トハ万葉ニ種有ニ臥
 有立在念有堤有借有トヤウニけせてへめれヨリらり

るれトハタラケルニレハ、有ノ字在ノ字レテ書キ記セルノ
 曉ルヘレ右ニ載タシハ皆三卷ノナリ自餘ノ卷々ニソノ例ナ小夥
 シサテ此けせてへめれヨリらりるれト活ラク語ノハ八衢上卷
 十ニタ言語四種論ニミエタル論メトモヲ考テ明ムヘレ又立カヘリ示
 サン咲ダる至るナトハソノステニ然ルライヘルニテさくいするナト
 ト今然ルライヘルトハ異ナルモトノコ、ロヲ辨シトナラハ四段ノ活
 語凡ノ第四音けせてへめれノ六ツハ已然言トイフモノナルカユエ
 ソト知ルヘレソノ已然言ハ將然言トイフモノニ對ヘミルヘキヲハ
 和語説畧圖ニテモ先シルヘキコトナリ但レコ、ニ又コトワリオクヘ
 キヲコソアレ古事記ニテハウミトトミエタル詞ノ日本紀ニテハカ

め係トミエタル(六ノ条考) ナトソノニツ何レニイヒテモアルヘキ處モ

ナキニアラ子トソハイツレニイヒテモソコノ物ガラ車カラノ趣

ニヨリテハ互キニコソアレ此詞ツカヒノ互ニ通フ例シナルニハ非スヨ

ク辨フヘシ此ハ永願寺説言トイヘル法友ノワカロ述レテ眞宗聖教和語説ト題ケ物スハカリナルカラニカ、ル問ヲモ發セルニテカノ略因モ之カ請ニテカケル也

五 四段のりくらしきの第四音〇〇〇〇 けてへめれ〇〇〇〇 けらりる〇〇〇〇

れ〇と活きたる語〇とも其第二音〇きち〇ち〇ひ〇み〇りを〇

たると受くる詞ともとの同異

出雲國より山本義之進道守といふるらくよわくり訪ひ来て

詞のつうひさぬの夏ともくしく考へおなる事とて語りも出て問

ひもかけける中より久老の説に世人すとせるとのんぢぢめを志

らすしてさうひに相紛う一つか多しそも此けちめせざるハ

過去より現在へうつる詞すも現在より未來へうつるなりと

いひさてるぬとくを舟出せるも舟出しとるといふ事そとや

うよいへるを明らうあるやうよを今少しこころやうぬんそ

せるもあつるといひこころ意をそよろしうるへしやちてハ思

へるとおもひひると或ハあれるとありとるもかとも全く同

しといひへきさぬなるをおろうへひとあうへあとのこられ

め審うたりうこく諺よくゆをへとそ何とやいひらんこ

ちそし侍るといへりあれは答へたるやうすとせるもめ

辨へるそれあんやうつといふらしといひへはれとせるをえ

已可れま^〇あきり^〇と云たるハい^〇ある風^〇身^〇をえ^〇ふ^〇く^〇らん^〇と見
 え^〇る^〇か^〇と^〇より^〇考^〇れ^〇ハ^〇け^〇小^〇開^〇たる^〇と^〇い^〇ふ^〇同^〇く^〇
 至^〇れる^〇ハ^〇い^〇ら^〇た^〇る^〇と^〇い^〇ふ^〇同^〇く^〇更^〇と^〇い^〇ふ^〇へ^〇き^〇さ^〇ぬ^〇あ^〇れ^〇や^〇そ
 こ^〇は^〇聊^〇つ^〇の^〇ら^〇ち^〇先^〇え^〇な^〇は^〇ある^〇事^〇と^〇て^〇これ^〇を^〇ハ^〇其^〇哥^〇其^〇文
 の^〇詞^〇つ^〇ま^〇の^〇ち^〇ら^〇へ^〇小^〇任^〇に^〇へ^〇あ^〇と^〇い^〇ひ^〇て^〇や^〇む^〇へ^〇き^〇こ^〇と^〇い^〇ふ^〇非
 け^〇哥^〇あ^〇と^〇て^〇そ^〇の^〇ち^〇ら^〇へ^〇の^〇こ^〇よ^〇う^〇へ^〇く^〇い^〇つ^〇れ^〇と^〇い^〇ひ^〇て^〇も
 よ^〇ろ^〇き^〇も^〇あ^〇り^〇た^〇あ^〇れ^〇様
世をそむく昔の衣たひとよみハ
そむるといへる意なるへきを向ちへの篇
よそむくといへるカ
うあやまきこれちん 又^〇必^〇し^〇も^〇た^〇く^〇ひ^〇と^〇い^〇ふ^〇ち^〇い^〇ひ^〇て^〇あ^〇る^〇へ^〇き^〇も^〇か
 き^〇よ^〇ら^〇れ^〇あ^〇と^〇へ^〇も^〇雪^〇霰^〇あ^〇と^〇の^〇す^〇て^〇小^〇零^〇て^〇あ^〇る^〇を^〇ふ^〇れ^〇と^〇
 も^〇あ^〇り^〇と^〇る^〇と^〇も^〇か^〇い^〇と^〇い^〇ふ^〇へ^〇け^〇と^〇万^〇葉^〇集^〇と^〇い^〇ふ^〇漢^〇文^〇字^〇

あ^〇て^〇と^〇る^〇や^〇う^〇そ^〇の^〇一^〇を^〇い^〇た^〇く^〇れ^〇集^〇十^〇卷^〇
十^〇六^〇と^〇い^〇ふ^〇と^〇る^〇ハ^〇零^〇有^〇
 と^〇も^〇零^〇而^〇有^〇と^〇も^〇う^〇け^〇る^〇を^〇ふ^〇れ^〇と^〇い^〇ふ^〇零^〇有^〇と^〇う^〇き^〇て^〇而^〇字^〇を^〇
 そ^〇へ^〇と^〇る^〇え^〇か^〇く^〇同^〇卷^〇處^〇々^〇小^〇梅^〇萩^〇あ^〇と^〇の^〇咲^〇と^〇る^〇ハ^〇咲^〇有^〇と^〇の^〇み^〇く^〇ら^〇
 有^〇と^〇も^〇う^〇け^〇と^〇さ^〇け^〇る^〇と^〇あ^〇て^〇ハ^〇咲^〇有^〇開^〇有^〇と^〇の^〇み^〇く^〇ら^〇
 外^〇の^〇卷^〇々^〇も^〇注^〇へ^〇て^〇四^〇段^〇の^〇活^〇語^〇の^〇第^〇四^〇音^〇け^〇て^〇へ^〇め^〇れ^〇と^〇
 り^〇ら^〇り^〇る^〇れ^〇と^〇活^〇ら^〇ら^〇る^〇と^〇い^〇つ^〇れ^〇も^〇有^〇字^〇在^〇字^〇の^〇ま^〇じ^〇と^〇う^〇け^〇ら
 ら^〇多^〇く^〇そ^〇の^〇二^〇音^〇き^〇あ^〇ち^〇ひ^〇み^〇り^〇を^〇た^〇る^〇と^〇受^〇と^〇る^〇と^〇け^〇或^〇た^〇有^〇
 在^〇と^〇の^〇み^〇く^〇ら^〇或^〇ハ^〇而^〇有^〇而^〇在^〇と^〇う^〇き^〇も^〇た^〇る^〇孤^〇見^〇へ^〇此
 寬^〇狹^〇通^〇局^〇を^〇考^〇へ^〇か^〇え^〇押^〇せ^〇る^〇思^〇へ^〇る^〇を^〇む^〇ら^〇る^〇い^〇ら^〇る^〇わ^〇ら^〇い^〇ふ
 と^〇お^〇し^〇た^〇る^〇思^〇ひ^〇と^〇る^〇を^〇む^〇き^〇と^〇る^〇い^〇ら^〇る^〇あ^〇と^〇い^〇ふ^〇と^〇の^〇其

すゝ小然る處これのつううまうれゆく意のおもさかるゆのけ
ちめりる事うまらう味ひえられさらんやけ 但一 下二段中二段
の活語かと八音四音
よりらりるれとけらうくこちがれハ中二段のくち方ニ音きあちひみり
下二段の必才四音えけせてねへめえれをなると受る詞のこけある

六 さげる ささぎの類

或問さげる花とりやとさね花とりふとの類はち先ゆらゆら
れのつううまうと人も辨へてあめれと又紛らせりとおぼしきも
あるハよろううらうらうと覺えし古事記 明宮の段にて吉野之
国主等の酒献もる哥 一迦美
斯意富美岐とあるを日本紀にてこれハ 應神卷
八丁 伽綿蘆淤朋淤和と
うれたたくひよかたをよもいひへきうといへるハうへなるいふ
うらみそあうかよけしむいひてよき處をきハあらぬ紀記の綿

蘆と美斯とをさげら其例なりあうはあれ尚必しもわきまの
くゆらへき事ともて多れ玉霰とこれう辨あるハ從ち一は
えらうと夏そか おくある(十四)の
茶々考へ合はへ

七 ありさげる こらぬ

今大彫本ともある松屋文集このれも芝居言葉の文こら
させんとて 云とけらる處をやくのこらもとこらさんとてとか
きてありしを見てこら不成語のやうに聞ゆらひう耳のをし
くやとりの松屋翁一直といひしをやうう人あまれてけふこ
らといひつこらさせんとて一ハ改められきうく速に諾ふ人
あそあれ世にまけをしむとうのあらせらるともかき其名

のきこえゆるるハあやしくもつりていと多うもの也そは
 論外の事あれとさやうなるハつても實ニ心小おちかて
 かるてあらさんころさせんいつれいひへきよやとわり
 々いも少うさめうらよりて今こゝにああおんと抑羅行
 中二段の活といへるこそ懲りんころこれと用くと舊將舊
 下スガリ下スガリなと同一活き語と懲らん懲らん懲とやうハ
 さういひへくさるこそ舊らん舊ま下ら下まあハひ
 へうらぬと准へてあるへ又同字と當りてころあへも大う
 かようか如くかれと勸善懲惡あといふをりのころんあ
 さんとやうに活きてそを散らん暮らさんあとい同一活き

下カスレ舊の佐行活みうつりて下ろさんおろひ舊さトあろひ

やういひつらるるなる同一此ろらなくの支ハ別マこれらと此

佐行四段活といふりの也りの羅行中二段の活きまうせむるを

いふをりハ舊もよても下ろよても下りさせん舊りさす

とやう小とそいひへき格りなるよ考へ合せて懲りもころさせん

ころさせんとやうのいひへき例たる事知へあらさん

ころさせんしめけちめ明らるるいひや猶山口栞中卷 二一八

八 浴むといふ詞の事

浴字よりくる詞の活きとハ衢上の卅三丁 下の卅九丁あるさうめれ如くよ

つくり然るる々々麻行中二段活他一然るる八佐行四段活きなり
 くれハらぶせんあつ
 つくふと古きたりへり 然る一榮花物語の音楽卷二釋迦仏の摩耶の右脇
 下り生れさせ給ひて難陀跋難陀二の龍空よりしてやひひ。奉
 りらるよりけりめて悉達太子と申て云 云く見えくるハむハふ
 一例の通ふそれがひとらる一通へるうやさうハかほ佐行四段
 の活ききこえたり又びえきくみの音通うてこれ麻行中二段の
 活なりを佐行變格活の爲といふ詞してうけらるものなりや
 といふれもむきををとへる人なり此答へやけきよ似てくさ
 えらうはしめれ考よらんといひてそらりらる さて此詞の例を底
 のくけし数々出せり
 ろる々々難陀跋難陀のこほとけし然せるうていさゆる他一あ

活雜十八丁右
 波行下二段云
 コハ改テ
 此詞を今八佐行
 下二段の活らた
 りのこはうを
 トレテヨケン
 尾崎基心付
 イトレ

ける詞と見えんも聞えかたれとらなれも也 尚らむさんをあ
 さんとやういへる
 たぐひもら 此詞を今八波行下二段の濁まる音の活きよはらる
 け也考ふへ 昔も佐行四段一あむさんあむい。あむい。あむい。と用き
 と昔も佐行四段一あむさんあむい。あむい。あむい。と用き
 一とめある事八ちすも見え山口栞もさなめつるう如し
 但し今世のあつとつふもむけふちうき此ころのこけけらる
 と々公事根源 中 小佛生會々云 天龍下りて水をなくきて釋
 尊一あふせ。奉し事を申とあるをうてあふへし あふせると
 りえらふ
 十を俗言一ハあつりすへてのささあうなり但し今世も
 つくし人たらふすと雅の例一のめりをうくめうた
 九 聖りを用いへるひとつあう
 或問榮花物語 さあくの
 よらこひ 御をちれ入道中納言殿 云 見し人も忘れ

のちゆく山里こころをくもきける春をか惟成の辨もいみし
 う。ひちり。うそたく今の仏哉。見え聞えて行ひたり。と何處此い
 みしう。きいみしき。の寫誤なるへきうさうてハひちり。うそと何
 る詞をさすりかききやうたういふ小答あくらひ。こころを。あ
 べ。を用言うしてこへ。又。ハぬぬるの活きの。也忘れ。こころ
 思ひこり。うそあとの。也。うく用言の。へうつれるも忘れのれ
 ころ。これり。みを活き語連用言といふ。このなるひちり。のり。とら
 る。れ。と活く語あること。山口菜。源氏物語をとを引て。あ。免
 たる。如し。これ。ハいみしう。といふ詞。うそ。き。と何りて。あ
 それ。こ。よ。う。ね。ち。れ。住。此。榮。花。なる。い。う。う。も。か。つ。て。あ

てか。う。う。その。詞。を。う。けて。を。さ。む。る。所。々。末。の。行。ひ。り。と。い。ふ。處
 そ。と。も。い。へ。た。い。ち。れ。ぬ。へ。り。れ。た。何。そ。は。て。つ。あり。聖。り。と。云
 ふ。夏。を。う。く。躰。言。と。の。覺。え。こ。固。執。を。こ。小。も。あ。れ。見。い
 う。そ。は。い。え。ん

⑩ 醫 薬

光徳寺法雲問龍舒居士の浄土文十二の 薬者只能醫病不能醫命
六丁 と何る所の文点。マ。ヒ。ヲ。ク。ス。シ。テ。イ。ノ。チ。ヲ。ク。ス。ス。コ。ト。ア。タ。ハ。ズ
明曆 あり聞きなれぬ詞なり。い。う。小。答。ふ。こ。れ。あ。ら。さ。り。き。そ
板本 たいとおどろろき事なるをそれ。つきて思回せ。といひつて
 古文前集を披き。これ上の 子瞻。う。緑。筠。軒。詩。ある。人。瘦。尚。可。肥。俗
十八

まんそよろろへきうくおとよこら良醫々國なと字音
 てのこよめるめれとクスストよみてよらん史記百五大倉公列傳四十五何
 病醫藥已其病之狀皆何如の如きと醫藥二字をそクスレテ也
 此一用語して訓へく其下よ不當醫治とあるハ醫治二字アテ
 又クススあるへき欤されとクススト佐行四段よ活く語のなり
 てくろりよよつ進ハ醫はとよりよて又々治又療か
 これうれよあそりぬへりてクススト佐行の用言して治
 病の人よつたる詞クスルと羅行の活語してハ療病の品物よつけ
 る詞とこるめれたるの易の无妄之疾勿藥有喜をととクス
 スとよむとよくしてクスルとよむとよらんうくいせいのや

淨土文なる醫病ヤマヒヲクスレテ又縁筠軒の詩不可醫をクスス
 へカラスとよめりらんむと必かよらうとらあり誰よらさめ
 うつとそれとことあやそならんと此よさぬいとおとら
 おほゆるより出する考そらしととれりハこれと佛足石
 哥よれれとあそよとあきこなるをこらとれりやとれる
 藥也。ハ爲字よらまて佐行變格の活き語の志たるへ此
 變格活の志を何くれの躰言又何くれの用言ともその連用言
 よそへてそれをいとの躰言とるこその例也よら少
 らぬ事也書善くかく者のことをして万葉集二義之をてこいひ
 一らてらる即此意也
 笈をとらうける者の事をいして鑄物ける者をいとの一と

こともあつをやりかゝるといひてもよろしくへくたてと
 いふ辭へつゝをりハわら。てとそひへき又文中「これりきま
 るされ」又「そのりきのことれ」いふことわり記に遺に
 かゝは四段の活きよてとひふ詞へつゝとてて必のこ。て
 してといひてのこせ。あるせ。といはぬ詞なれハ被とらる
 をりたかくのこされ。あるされといふへく必もものこせられ
 るせられといひまゝきハおこれといふ詞の活きさぬハこれ
 とは異よ下二段の活きあれハてへうつゝときおこ。てと
 たいふまゝ被へうつゝ時おこれといひまゝき也とおの
 違ハ思ふたより但しうんもよるなむ人の文からハう

る處々とうくのよも盡いまゝ又とてハえさるまゝ
 是れさうしつげあらも思たねと今ハ勝せたる人
 のあるゆゑこそむいふまゝいふるハをしきつて思ふ
 まゝかきまゝ評め試み侍るを近きほどより先生たい
 めたまのりまはた此事をめけならぬやうに聞えむひ
 てしとあつらへつゝ三月十七日鐸舎の哥れ會のついで
 りきうそのち藤垣内うりかの京人千楯のいきて傳へしをその
 藤垣内翁いとゆゑう悦あひつ其よいんねとせられハ
 その夏此事なりきさてのち改りてその跋文今ハおこせら
 せしとあることふをなれるよなんつゝいふある歌よその

おくりの多きをけしる夏と翁とをまみやくに諾をれしる
上とかく隔あつつけおこせりやよろこひし月冊序いよ遠らぬ
おとれあらまゝまゐらせんあやむいおこせられしよの消
息ありき

(十三) ころ渡る

相模國人ニテ忠胤トイヘルハ哥ヨムニモイミシウ詞ツカヒナト心
スル人ニテカイナテニハアラサリケリ文政六年トイフニワレモ
ソノ人モユクリナク江戸ノゆゑあみのをニテアニテトカクカタ
ラフニワカ友鏡ヲハカタハシヨリオホエタリトオホシキサコオ
トロカレヌオノカモノカラサハカリハアタハサルモノヲマサテ

此人ノ問ヘラクみまゝト^三行下二段み渡ルト^四行四段一活
ダハ氏ニオホカルコニテ^三バシカルヲハシカスルナリ^四行四段ノ例
ニみまゝト友鏡ニ出セルハツノ例暗記セテ少シイカニツマホ
ユトイヘルニ答ケラク古今集ニぬきみまゝ人こそあらう
コハるモシヲ人トイフ躰言ヘツケタレハ四段活ナルーニハレ
万葉ナニクニモ少カラストハオホユルヤウナレトロラシクモツ
ラニハエオモヒ出ストイヒテマタノ日高田與清ガリユキアカ
ノ所藏搜索目錄トイヘルモノヲカリテサテ其家ナル何クレ
ノ書ドモヲトウテミレハ旅ナカラ家ニアリテヨリモ書トモノ
足ラヒテコトチヨウミ出タル証氏万葉八^四いほしる小田を茹^五

やる櫻ひとくちれとらうらの花を嵐の吹えらんと口
 スサミケルスナハチニ夕守コハミとらんとスヘキニアラスヤト
 アリケルライナナホカウトオモフトイヒシコアリキ然ニソレ
 ヲ又アル哥ヨミノ打キ、テケニみとらんとコツアラホシケ
 レナホみとらんとニテアルヘシトハシヒタルナリナトイヒシヨシ
 後ニコト人ヨリキ、テシコモオホユレハカニカクニみとらんみ
 るトイフ詞ライカニソヤオホユル人モ世ニ少カラヌニヤトモカ
 ツハオモフ、一ウルサキヲイトハテカクマテイフ伊勢集新勅
 撰ニあさみどりそめてみとれる青柳のいさを春の風や
 らんノみとれるヲコハみとらんナルヘシみとれるトテハ俗言ナ

リトアル人ノイヘルモナカノ、ナル俗意ナルソカシみとらんト羅行
 四段ニハタラクソノ第四音也ヲサラニらりるれトカノ有字在
 字アルコ、ロハヘノ詞ニツカヘルニテ折るヲを、取るヲとれる
 ナトソノ例夥キコトナルカウヘニコノ哥ナルハを、トイヘル詞
 ステニ他ヲ然スルナレハ次ノ詞ヲみとらんトイヒテハカ
 ①ノ条ニ
 テニイヒタ
 ②ノ条
 自他ワカチアヘ又詞ツカヒトナルコトナリ
 ニ云ン

⑭ 八衢序なる詞の活きの事

「あちちへ、ちちては」ハあちちひ。ちちてちトシ「千小かよませ。万小
 うつろハせて」ハうよま。轉ち。てトスヘキニアラスヤトハヤ
 ク文化九年春伊勢國へ後鈴屋カリカノ松坂ニユキシヲリ問ヒ

コ、ロミタリシニニツナカラサルナリトテ既ニ春庭翁ハウヘ
 ナヒ居ラレキサテソノカヘサニ植松有信カリ尾張ノ名見屋ニ
 物セシツイテニトフラヒコキテアリニカクサスワカオモフトコロ
 カタリシニコレモヤカテウヘナヒツ、志マテマセテニハ在リ來シク
 セニテフトカキツ又味ハ源氏ニほくくうち紛々事もやど
 待過ル日くくくへて云。云ナトハ日數くくひてトアルヘカシウ
 思ハル、處ナントそへてトアレハ味へあらてトカキテヨケント此
 序文カキシコロハ思ヒテカキ侍レカト今オモヘハアラサリケリ
 トサヘイヘリキサテカノ序文ニあくるむるトイヘルコトアリコ
 レモヨロシカラシトサテ後ソオモヒヨリシタ、レコレハハちま

上卷四左ノ四ニモ下卷二十四右ノ四ニモ又其
 二十九左中二段ノ活語トツラ子タル處ニモ

本書モトヨリシカハタラク語ト

セルニテサルハクサ、ノカナノ文トモニモマタ漢文ヨミノ訓讀
 ナトニモあくるむ。トイヘルコトヤ、フルクヨリモミエタルハタ少カ
 ラ子ハナメリサレト中昔ノ宇津保何クレノ物語トモ又枕冊子
 或ハクけろふ日記紫式部日記ナトニこくつみるトノミアマタミ
 エタレハナホソレニ從ヒテアラシコソヨカルヘケレトハオモヒ定
 メテ山口栞中卷ニモトカクイヒツルヲワカ然オモヘルニソラ暗
 ニア合ヒニテスナハチハちまノ作りヌシハタステニコ、ニコ、
 ロツケリトオホシクテ後ニ著述ノ詞の通路ニハこくろみる
 トノミイヒテソアナルカニカクニハ衢の序ニモ詞ノハタラキ

ノヨロシカラヌカ四ツモアルニテイト心スヘキコトナリカシソモ
世ニ宗匠トイハレ先生ト信セラル、人々ノコノアマリヲナセ
ルカ指シモツクスニシクイト夥シキカウレタサヨ今ヨリノチ
ヤウ、明カニナリユカンノチノビトニモハツヘカラスヤ

(十五) 羨[□] 志[□] ち[□] ひ[□] み[□] り[□] を[□] 志[□] と[□] 受[□] る[□] と[□] け[□] せ[□] て[□] へ[□] め[□] れ[□] を[□]
る[□] と[□] 受[□] る[□] と[□] を[□] 混[□] す[□] ま[□] じ[□] 事[□]

玉霰^一さく。さける。さげ。のふくひすへて此^一のけちめ
を示せるさうへたるさめとそむふさて其さなるハけき
あるといふるある故^一万葉^一ハかるた々^一ひのともあり
有^一字^一在^一字^一を^一き^一て^一其^一語^一意^一を^一あ^一ら^一せ^一る^一處^一多^一し^一其^一在

有^一字^一在^一る^一を^一ら^一で^一れ^一も^一當^一る^一あ^一も^一万^一葉^一一^一て^一其^一の^一字^一は^一て
る^一處^一々^一を^一考^一へ^一み^一る^一へ^一く^一さ^一ハ^一今^一現^一一^一を^一然^一る^一た^一る^一こ^一と^一惑^一ふ^一へ
く^一も^一何^一ら^一ぬ^一を^一咲^一き^一し^一取^一り^一し^一か^一とい^一へ^一る^一し^一た^一い^一ち^一や^一過
去^一の^一し^一を^一き^一し^一と^一活^一く^一 畧^一を^一さ^一す^一
ミハ明^一か^一ん さ^一る^一か^一ら^一し^一既^一往^一の^一こ^一と^一
を^一か^一る^一た^一り^一う^一く^一い^一へ^一ハ^一固^一一^一を^一混^一れ^一る^一事^一と^一も^一い^一ふ^一へ^一き^一し^一似
し^一れ^一と^一も^一は^一れ^一ハ^一名^一あ^一る^一人^一々^一も^一こ^一れ^一を^一混^一れ^一る^一夏^一今^一の^一世^一
と^一少^一か^一ら^一ぬ^一を^一ら^一れ^一と^一き^一夏^一誰^一れ^一と^一あ^一ら^一か^一ら^一あ^一ら
事^一と^一あ^一ん^一こ^一は^一す^一て^一 (四) いる^一至^一
世^一の^一条^一 も^一い^一へ^一る^一如^一く^一こ^一と^一と^一よ^一く^一こ^一と^一ろ
え^一お^一ら^一ぬ^一は^一し^一き^一夏^一一^一何^一れ^一ハ^一と^一と^一し^一れ^一と^一又^一う^一す^一て
き^一志^一ち^一ひ^一み^一り^一を^一志^一と^一受^一る^一へ^一め^一れ^一を^一
る^一と^一受^一る^一と^一や^一同^一や^一う^一か^一ら^一り^一 (五) 条^一合^一考^一へ^一

十六 活む つめる つみし

誰よりめりたるまららんわら木山學賢にてつらとき講主
 雲華院師の問りたる此比つる哥よみの寶船の画にかいつけ
 る歌二萬代をつら宝乃舟あれはよもきうまぬやとまりたる
 らんとつらをうらめをまゝ異紙にて萬代をつらさるる
 る舟あれそとかけをもみさうきいつれうよらんとりらるふ
 いらへけるやうまへて初なるやそのよみ人のうらとおもひ
 定めて初をつらつらひとせを後うらなるあつらよそそへ
 らんけよそれよらうきよこそとおもふそののうらある詞の
 活きあま此哥うらへてやとおもふやとあつらつらけ聊侍るをうら

らその寶の微瑕やをいぬるらんときこえける事なりきさ
 てかくいらへ一意をわらやと此里うらつてのち歌二あつ
 させる友これくれ語り試み多よ田中貞風のいさつめる寶
 のとまへきよやといりよまらうはさとし云へき但しそハ
 作者のころうらさるにかかるとやあらねくなといひあひ
 たるも詞の活きといふまをいみうえうある夏と思ふそら
 の一のせあるをいとをこら備へけれといやう云ひもてゆけ
 たりこれ實にたのめたるまきあやあるかうかあることの
 ついさ此つみしとつめるとさく又あをつむといふとの三乃
 けちめやうの夏すへてをよく辨へおへし然らぬといさ

大事コトつうるあともゆりぬへたれそなりさらくハ件の哥コ
つぎそのそえかゝるゆゑめすもてまゐとよむやうれことそ
云へき抑くる事の辨へをえ大事コトもさへ云也るハつうる
いづれらの条コ云へる趣きかゝ考合する

つれそはやよひの下の十日ハうりコ三條右大臣兼輔朝臣の家コまうり渡り侍らる藤
花さぐりやう水の花とりコうれこれおほみきコへだるついでコ三條右大臣うきり
かき名コ藤の花あれそをひもあゝぬ色のあうりうとあるコはコうきなる
ふちの花さぐりやう水といへる又一首のおもむきのもへつれも今咲き句ひ在る花
の事なるあゝあゝ然るコこれ返哥コ兼輔朝臣色深く句ひコもあち浪の立も
さそえつめるつみコもその論めコまきコは非すやなとて人もらんとていひ
とわつてんあめコ句ひコといへる今咲き句ひてあるあのおちれもコをめて句
ひそめてコあゝをいへるコ一前日句ひそめコハ今日君コ来すコをコを知り
ていさこのあそんちとコまさと留めんねコ句ひそめコハ今日君コ来すコをコを知り
凡そかゝるあゝひなほゆりつれもそのころをよく考ふへつらうのミ見てあ
やまつこと勿き但コ上の(六)の条コいへる如くこれハあちうみコつれもいさ

めへきう如きぬうひそこたきコもあちた
そハ又別コそなへさるあゝコはあちた知るへし

(十七) むうへいおへ

平井重民トイヘルハ此小濱ニテ詞ノハタラクキノコトモラリ、
語リアフ友ニテ詞の道さるる屋ライサヲニクカキナサントセル
人ナリアルトキイヘラクむうへや今も戀しき郭公ナト
イヘル屋ハイツレモ同レ方ナメントむうへノコトイコへコ
アキあらびをナトイヘルコ屋ノコトハ異ナルオモムキア
ルヘシコハむうへハモトおむうへノ畧ニテむうへはむうへ
トハタラク語ナラソレヲ躰言ノサマニむうへトイフハツ子ノ
言ニモカナレコ云云コウレシコニ云云ナトイフト同レ語格ナ

ルヘクサテる。ハガナルヘキヲコレイヒツケテ躰言トセルハ悲
 一き妹うとけしき君ノ事ヲ、かゝ妹うとけしき君ナト古事
 記万葉ナニクレニ見エチカクハあつゝ一き夜ノヲラツノ躰
 言トシテハあつゝ一夜トイヒ同き事ヲハおれしこゝナト
 ツ子ニイヘルニヒトシキ例ナメリサテいゝるハ往るいあん
 い。いね。トハタラクい。ソレヲハ世ニイハユル過去。文字
 シテウケタルツノしハ躰言ヘツク言ナルユエニハ連躰言コ
 截断言ハキ。已
 然言ハ。也方トイヒツケテいゝるトイヘルナメリト云リ
む。むトイフコトバアルハ嬉む悲
 一む愛くむナトミナ同例凡覺エケレハゲニ然ルヲナルヘシトイラヘキサ
 テツイテニエラヒオクヘシ此詞ヲトクテアル書ニわっしハ

向ハト云ト云ヒ向ノ字サキニトモヨメル故トイヒむる
 一ノし。ヲいゝるノしト同ト云ル説ハヨロシカラシ

十八 散らちちらん

重民又來りて問ふ古今集春たるちちらんちちらん人の詞うの
 あまの人の來てもみかくこのかあるハ事もかう聞やれ
 ひとあみしの方れそその次上ある哥いゆさく我もちちらん
 人といへる如くありらんをそむくハマをら。書あやぬ
 れるか。ハあらしうとありやう。答ゆるやうその事と思む
 出る夏こそあれ今ハむら文化八年夏ありき松屋藤井先生
 の古今集の講説。此うこのあんと先日訪來てあひ見

しその君のりふハ今一度又來りもやびると要しまちみよとそ
 の人の來るを願ふ意をあゝハせる也と有しを京にて萱原文
 藏主善の許にて聞しをりけことそおもひとりし此説にけり
 りを考へ玉へといらへきさそついでいし詞玉緒六卷十
 とをもみて曉めおくへき也あん一凡二あり其一を願ふころ
 あり ち。あん。ち。あん。か。い。へ。る。こ。れ。也。さ。て。舊。り。あ。ん。起。き。あ。ん。か。い。へ。る。も。あ。る。へ。玉。の。を。こ。此。事。を。も。ら。せ。り。そ。ハ。り。け。り。明。む。し。 二は
 末の事をうけていぬ 五。の。を。う。け。ぬ。の。あ。ん。い。へ。る。是。也。 此末の夏をいふ ち。あ。ん。也。き。あ。ん。か。い。へ。る。
 おりくくあゝゆる活語の連用言を受く又願ふ意あるをち
 らゆる用き言の將然言 い。ち。ゆる。ち。ゆ。の。類。い。ハ。四。段。活。語。こ。て。ハ。乍。ち。よ。く。分。る。中。二。段。の。こ。て。ハ。此。願。ふ。意。の。も。う。け。末。う。け。て。の。夏。く。る。を。も。旧。り。あ。ん。起。き。あ。ん。と。云。へ。り。ハ。初。学。或。ハ。紛。え。し。う。ら。ん。う。な。れ。よ。く。味。ハ。其。処。こ。て。自。ら。も。分。り。て。あ。る。へ。し。 を受くかく

て將然言をうとるこて願ふころのたぬねと活く語のち
 んのつゝある也又連用言を受るこて末の事いふあんハはもそ
 のや何のむじびとこそそのむじび 此。時。か。め。い。な。る。か。り。 を分ちて玉のを初卷
 ひもくみ こ。て。ハ。四。十。二。段。の。こ。れ。也。 其例証とあることこそけんを示せあ
 也よく辨ふる

十九 散りぬれ

散ぬれはちあきとあるあき物を今日こそ櫻をらけをり
 てぬコレハ花千リナハ戀フルレシアラシチラサルホトニ今日
 折テニノ意ナラニハ散ぬれえト已然言ニタイヘルハイカ
 ナルユエソトコレモ重民ノイヒテ又ヤカタイヘラクモ散

ニ俊頼朝臣ささり木の木下蔭一行觸まえ

此は將然ラウケタル

ケタナルコトさむしト衣手さむし蟬ハあけともトヨレニナトハ

此は將然ラウケタル

ナホ觸るヲ古キサテニテナラン

但し今ノ本ニ雪ふれえトカケルケニセ

カヲナルヘケレトコ、ロミニオモフトコロライフサテ衣手さむしトアルヨリミレ

サルヲナランニハカクイハハミニキロ

ハふれえハ已ニ然ルライヘルナルヘウオモハルナリ觸るト今世ニイヘハ如クタ、

下ニ段ノハタラキナラハおきふれえハ將然言ナルヲサテハ寒ハハイトナメ

カタカルヘク今ノ人ノオホエタル觸るニテハ下ヲ寒しトイハニハ上ハふれえト

云ヘキ格

也考ヘレ泉ノ哥ナレハステニ樹蔭ニ到リ畢リテノ意ナルヘレサ

テハ蟬をさけとも

トイヒ難キニ非ヤト思フニヨリテカクハ云也但し此第三句由さふれ

トイヒ難キニ非ヤ

てトセル一本モアメレト類字大和詞ニソハ進をヲれてニアヤメレ

ヒケルハ然ナリ

ナランコト次即百首ニモ此詞ハアルニ考ヘテモシルヘシ又土佐日

記ニいさふりのとれる磯

記ニいさふりのとれる磯ハ年月改いつともわくぬ雪のこそぬる

コハ相摸風土記ニ伊曾布利所謂振石也トアメルヨリ考レハふり

ハ振マトキコユレト又万葉二十

ハ振マトキコユレト又万葉二十大君のみあつりあみいそ

布理うのつりわくる父母をたきてトアルナトヨリミレハ石觸

モアルヘシカニカクニ道也さまりハ道行觸ニテ古今集ナル雁

ノ哥ノハ俗譯セハ雪中ノ越路道中ノユキヤタリツイテト云

ト聞ユコレヲ遠鏡ニヨイ処テユキアフタト譯セルハ非也雁カ道中ニシテワカ

アラズサテ万葉十一

アラズサテ万葉十一白細乃袖觸而夜吾背子トヨウコウラケアフ也カレニアヘルニハ

点ツテラフレテトアレト白細の袖をトイヘルヨリ思フニ袖ハ振ルモノナルライヘル

ニ觸ト借字セルナレハコハフリトヨムヘレ同卷ニ又玉布このミちおきふりおもひ

詞ハモト此万葉ナルヲミ子ヘルナルカラニ觸るヲふらん

モノナキヤウニナリテノ後モナホ此道也さまりハ古ヘサマノニイヒナラヒツ、

てしをえニオロツカナルハナカ、

不審ヲタニイハヌトアアルナリケリ

○(卅一) 名をやとちなん

平井氏ニをみおへしねあかる野をこややうせはしやあそこの名
 をやとちなんコノ第五句とてしち。何レカヨケントトヒ試ミルニ
 重民答へテ名をやノをモシヨリミルニしち。なんトアル本ヨキ
 ニコソト思ヒツレト遠鏡とちなんノ本ヲ用ヒサテ譯アダナ名ガ
 タ、ウカシラヌトアルヲミレハを文字ハカロクミルヘキニテ名
 やたちちなんナリトミンハ明ケキヤウニ今ハ思フトイヘリオノ
 レカ思フハイサ、カ異ナリたちちなんノ本ヨカルヘしち。リアル
 ハモト寫誤ナラムトソレハサソオモヘトをモシハナホイトカロク
 ハミルヘカラズ抑たてんたつ。ハ使然詞誰モシレル如クナルヲ

た。んたちたつたてトハタラク方ヲハソレニ對ヘテタ、目

然詞トノミオモハンハアカヌトナルヘシタトヘハみゆるき
 るハコナタヨリカナタヘノ使然みゆるきこゆるハカナタヨ
 リコナタヘノ自然トニツハイフヘケレト人ト見えそと聞え
 さるるはときこゆるナトハコナタヨリアナタヘキカシメミシム
 ルニモイヘル如ク今たつトイフ詞ノ四段ニ活ケルモ活用ハナカ
 ラモハラオノツカラシカルト又モノヲシカスルニテたつるトイ
 フニヤ、似テたつるトイフヨリハカロラカナルツカヒサテト
 ナレルナニ例多カル源氏柏木卷ニせめてあうへえおのほら
 らあるまうき名をもしち。それをもむとやれうとぬとこれ

出来るやうも云 云貫之集ニまことかとこれとも あうい みるたをいふ
 そこのかき名をたてるふるへー敦忠集あけひていいうて
 とまぬぬれ 衣 名一のきたちてやぬんとやけるコレヲ考フ
 へし新後撰あのをれと物思ふ人も浮雲の空に声ける名をの
 みきたつ。又 同集 来てうへる名をのこそたつ。か衣下ゆふ紐の
 心とつねもコレヲハをトノミアリや。文字ナシサテ四段活ノ
 ぬつニテムスヘリカニカクニ使然ノカロキトコ、ロエテ見レハ
 ちちあんニテ名をやノを。モシモヨクキコユ見ゆる見あるト
 イフ詞ナトモ自ラ然ルハみゆるワサト然ラシムルハ見ゆる 玉あ
十二ア即 此辨アリ ニソハワカルトワレヨリ人ニミラルヤウニスルヲモ

見えトイヘルコアリ絶やれトとあるトナトモ大カタノワカレハ
 アレトクハシクスレハカノマひぬれも身をうき草のねをこ
 えてナトモとやしてトイヘルハカリサタカニ然ラシムルニコソ
 アラサレタ、オノツカラ然ルヲイヘルニハアラヌコト孫をノ
 を。モシニテレルヘキナラスヤカ、ル例スヘテイト多カルコナ
 リカノみしれトイヘルハカリワサトシカスルニハアラサレト
 み 羅行四 段活ニ イヘルガみたる 羅行下二 段活ニ イヘルニハ異ナルナト
 ノ類ヒコレカレニヒロク考フヘキコソトカタリテヤミキ

廿二 沖る

史記楚世家 十 有鳥在於阜 云 三年不蜚蜚將沖天 云 同書

滑稽列傳^二有大鳥^云云三年不蜚^云云此鳥不飛則已^一飛冲天
 かとみえしる沖^一あしる語^{ヒ。ル。ヒ。}。ランか^一羅行四段^一活
 く語^一りやと問ふ博士^一りり^一とひ^一る^一といふことと物^一みえ
 するあはえなりれえ何^一う出^一るやいあやとあ^一れ^一と
 活きたけ^一羅行四段^一ときあ^一とい^一らへ^一夏^一うき按^一するに
 秀字^一あ^一れるひ^一つる^一といふ詞^一ひでひづ^一ともい^一ハイ^一の省
 ける^一よ^一も^一た高出^ヒあめ^ヒ ひづがもと^一といふ音便^一よ^一四時
を^一レ^一イ^一の如^一なり^一とい^一へる説^一ハ非^一也 今も
 高^ヒ入^ヒよ^一てひ^一る^一と^一う^一ける^一と^一も^一う^一を^一違^一かる^一は^一あ^一る^一う^一又
 れ^一と^一あ^一も^一や^一こ^一を^一世^一い^一を^一ゆる湯桶^一よ^一よ^一て飛^ヒ入^ヒとい^一へ
 る^一よ^一音訓雜^一なる語^一ある^一う^一つ^一う^一と此沖字^一の訓^一と^一る

やうに^一なる^一う^一又^一と此沖字^一よ^一つきて飛^ヒ入^ヒとい^一ふ詞^一を設^一け^一る
 う^一も^一や^一らん^一さ^一る^一も^一神字^一直^一上^一飛^ヒ也^一、^一あ^一る^一う^一ん^一乃
 字註^一をおもひ^一て^一や^一らん^一は^一も^一よ^一りのみ^一て^一詞^一よ^一あ^一ら
 ざる^一あれ^一ハ^一その文^一とも^一を^一さ^一み^一えぬ^一う^一へ^一あり^一あ^一れ
 とも活^一き^一り^一ぬ^一なる^一は^一羅行四段^一の^一よ^一て^一今^一え^一の詞^一と^一せん^一あ^一
 か^一て^一事^一う^一らん^一さ^一て^一これ^一を^一和^一行中^一二段^一 率^一うる^一を引^一
みる^一と^一云^一如^一く
 ら^一く^一も^一や^一らん^一と^一ある^一人^一い^一へ^一せ^一と^一あ^一う^一て^一あ^一る^一る^一
 さて^一い^一て^一い^一て^一い^一て^一ん^一史記楚世家^一なる^一文^一上^一の^一せ^一る^一如^一く^一なり^一奉^一要^一小^一補^一も
 韻會神字^一の註^一の^一せ^一る^一文^一ハ^一楚世家^一と^一滑稽列傳^一とを^一よ^一と^一き^一へ^一あ^一は^一え^一て^一の
 こと^一を^一あ^一ら^一ん^一さ^一て^一件^一りの語^一を^一ハ^一會^一ハ^一神^一は
 彙^一ハ^一沖^一典^一ハ^一沖^一引^一用^一せ^一り^一三^一相^一通^一する^一なる

卅三 言足ぬげとひる詞つうひ

詞一給ふといふことそへて尊むべき人の事をいふにのみふと
 ていふへくをりのみふとハいふへくうける也そそ知りのみふ取り
 のふかとハいふへくれと知りのみふ取りのみふとやうにハ
 いふへくうけるに同し古哥にむねをり火に心やけをり
 心なるを心やけみりりのあろ也みありををりといふに
 ては有字の意あるゆゑそれをあつて又を居有
 いとぬあり居之をわつてよみユラレリとよむたよろし
 うにわつてヲリとよむべき也さて紐鏡かとり居有の二
 を同活として ハちま下 四十丁右 出せる事わつてかかれと精くれ
 るときた有の二して示してをりを知れり思つるかといふた

をへ入れぬへきよく考ふへ

○廿五 居 をりい、有りとの活きさぬの同異

平井重民間て有り居りとハ全く同し活さぬ也 ハちま下 四十丁
先も古事記傳
十四八十九册かき きこゆを居居れりといふことも何れと有ハ何
を同しゆの也 れりといふへくもおもえぬいふにわりけるに答て漢籍
 讀こそ居之とよめるやうの處をり見えてこれ雅文小内云
中勢集 何ころのをれるかへのかまきこを千よをや色も引
 へるやまある やそからんこ居有のやうにきこめれとさハ何し折有る
 なる抑をりをもみりりのつまりありけるを四段の活語とも
 の第四音けてへめれよりらるれと活るをいつれも有字
 在字の意なるかゝるに①韻のり文字を截斷言とれるよ々万葉

一即くる處々立在^{タテ}靡有^{ナシ}とやうにハかける也。此をり。其
 してり。さ。り。か。ふ。ぬ。ま。ひ。み。ま。ま。その。さ。か。と。た
 々ぬ詞ありされそ古今集。たてれを。も。と。よ。め。る。哥。見。や
 あけ。よ。そ。一類ひてからたわれ。い。ま。り。れ。と。立有^{タテ}み。ま。を。ひ。て
 たる故。一居有^カとていへるなるへ。但し居^カる。と。ゆ。和行一段の
 活なれ。大第四位なる音。一。ま。活。う。さ。る。う。故。一。第。二。音。の。第。五
 音を。一。轉りて。と。有。と。活。ら。る。る。の。也。四。段。の。活。語。ハ。い。つ。れ。も。第
 四音。已。然。言。と。ある。け。せ。て。へ。め。ま。よ。う。ら。り。る。と。活。く。定。り
 八。ち。よ。上。 卷。十。二。丁。九。 た。た。を。四。段。活。あ。ら。ぬ。外。の。活。き。語。と。て。か。く。ら。り。る。れ
 と。活。く。へ。う。る。音。第。幾。音。と。い。ふ。定。り。た。一。こ。ま。も。意。得。置。へ。き

事也而有^アとありみえありとやうになりきりハハ
 里^シ爲有^シとせりとたれるう。一。考。ふ。へ。く。又。第。二。音。の。一。の
 活語。一。て。い。ま。ゆ。一。段。の。活。ある。と。は。あ。れ。外。の。と。ご。り。へ。う。つ。り
 一段のち。ぬ。活。き。と。なる。を。り。その。行。り。の。第。五。音。へ。う。つ。る
 も其例ある事を明むへ。一。干。る。を。ほ。ひ。と。云。ひ。 ほ。た。波。行。才。五。音。也。こ。れ。た。才。二。音。ひ。の。才。五。音。一。轉。る。を。の。い。是。も。才。二。音。を。才。五。音。一。轉。せ。る。同。例。也。こ。れ。を。ハ。又。カ。ハ。一。轉。る。也。と。い。ふ。そ。の。才。二。音。の。才。一。音。一。轉。る。ま。の。例。と。別。あり
 と云ふ。如く居りれを。和行第五音なるをこれと第二音
 の第五音一轉れるありといひやりりれを。さ。ら。う。訪。來。て。い
 たく古事記。一。表。理。登。古。今。一。や。け。を。り。と。み。え。る。か。と。い。ふ
 うさぬ。い。ひ。も。せ。ら。れ。ぬ。へ。り。れ。と。水。鏡。一。野。干。を。ま。つ。ね。や。申

侍りしことのおろり云の末よめの女おろき怖まてえへいそ
 野干ありてまうさあうへこのほりてをり。をとおれをみて
 あさほしと思ひ云云といへる處ちとやうのかうふこよみよて
 からは必をり。といふへき處なるをういへるよををり。か
 けりあること。いふこと知られざるをいふこと。よろこをり
 けり然る事こそ

〔廿六〕 似る 煎さる

似る 煎るを全く同一活語と覺しき。此二をえ然らせしむ
 るをいふをり似と似るといひて似るといふは煎るを
 煎るといひて煎るといふをいとおほえし。文政八年

の冬江戸に在る時石川雅望 つれも飯盛といふ名うて
され哥のうら聞える人 のいひけ

るはふと思ひき此ころ其人のありハせる雅言集覽をえれ

集覽二の 五十八丁 ちのち其説出たりた。此説ハ尚よく考る。すまは

諾ひくきことなりある。山口栞 いひる いひる いひる いひる

とすへて。この詞の活きより。例をハれ。す。り。乃

うへ。は。示。つる也。抑 集覽一
引ける 宇津保嵯峨院

巻一。うる類とにせて。せん。 これも集覽
引る如く 枕冊子源氏浮舟卷

か。ある類と。今 いふ の心なるやう。あれ。よく考ふれ

けちめ。る事也。煎させ人。ものを煎さる也。似せ。み

つる物を似る也。又。せ。 いひる と敬ひ詞とある。夏かく

ろ々す。文字より事と云續く。さて佐行四段の活き語といふ
 こゝいとあうかしのぬいさくやうて此古徳傳一本の左訓に先
 言のひよりふけサキノコトハラクユとつうて後會の左にえノチニ
 アヒタテツランコトヲ子カフトナリとつうていふそのころ
 明うなり抑古徳傳の御造語の雅やうをうへたう味あをき
 更とも此外にもすへていとおや心をつくへき事の一やぬ
 なるさて又ついで云此詞を用きのころてつうて下二段活
 きをうきませはといふたきひ皆やまなりなるそし
 又誰も知
 せらる

かゝるなり重蒙の爲いもん俗文に荒増とかきて
 大抵の意この詞をつゝハ雅語ハかた更そ

○(廿八) 糸をみあへ

女郎花ヲカクセル哥古今集ニ白露を玉にぬくとやさくこの花
 も葉もいをみあへトアル哥ニツキテトセ京ニテコノる
 ハるるるれト活ク詞ニソアナルヘキサルハ下一段活トイフヘキヲ
 ハちまゝコレヲモラセリト云ヘトイヒ人アリレカトコハナホ
 經ろトイフ語ノハタラキニ聊モカハレルコトアラレトイトミレ
 コトアリキ後ニ考ル後撰ニあつるこへつるほとなり白糸
 の云云をつるより云拾遺君が来るやと絶せぬ瀑のいとん
 るてははらき物とつる此れ外にトイヘルハオホカレトふ

〇活判

上のとてり三十條松えりみ出とてり天保九年四月二十三日也

〇四十九終

天保十年 亥巳 二月刊成



